

つばさ川柳 願法みつる編 (138号)

『自由句』

もう一度生を享けても空へ飛ぶ	田所	健
人生の機微を感じる古川柳		
野の仏笑ったような上り坂	谷井	修平
涙なく子供に還る母見つめ		
市松の柄で迎える江戸五輪	中井	極
どの問いも答は同じ第三者		
難産の役員選ぶ新年度	濱田	喜己
歳重ね引き際時が駆け巡る		
オレオレと言う四歳の快男児	蜂巢	徹
詐欺と拉致慣れぬ漢字はウロ憶え		
何事も一番乗りの醍醐味よ	藤沼	智弘
大会へ独りカラオケリハーサル		
雪国の観光資源湯浴み猿	堀内	今一步
姫御前鬼面にもなるヘッディング		
地震国海に横たうハンモック	若松	靖夫
出棺の狭い玄関ボタン跳ね		
飼い犬は野次馬ジャジャ馬主に似て	岩崎	篤子
ご老犬いずれ介護の傘寿来る		
好きなもの飲んで下さい酒は別	佐原	利幸
ベランダの大工工事に気の遣い		
やり甲斐にやっと出会った趣味の道	末田	洋一
やがて来るゴールの前で一休み		

天辺で孤老の鴉嗚呼と啼く
ゴキブリの命限りの逃げっぷり

願法みつる

課題 『開ける』

みつる選

笑点の新司会者が開ける窓	蜂巣徹
開通の高速道に閑古鳥	中井極
頑なに心の扉開ける笑み	若松靖夫
開ける度馬脚出てくる出納簿	堀内今一步
慣行に風穴開けて活性化	濱田喜己
脳の窓開ければ風がすーいすい	岩崎篤子
寝不足の夜通し介護窓を開け	谷井修平
胸ひろげ友の悲しみ受け止める	田所健
オープンヘチラシ片手の主婦の列	末田洋一
秀 ちびちびと飲んでる内にカラの瓶	佐原利幸
秀 わざわいにならぬ程度に口を開け	藤沼智弘
軸 スクープもない特老の開放度	願法みつる

「雑感 2」

今年も各地の川柳大会が目白押しです。長い歴史を綴る吟社も多いのですが、特に目立つのが行政による文化祭一環としての行事が多いことです。何処の行政単位も、自らの地域の文化度を顕示したいのでしようし、事実、高齢化社会の傾向として文化・文芸の催し

物が安易な行政実績になるのでしょうか。

私の住まいする地域の行政担当姿勢はフェスティバル的な行事には積極的ですが、文化系の行事には存外ドライです。そんな環境ですから地域所在の川柳関連の団体、個人も至って牧歌的です。それでも年一度の大会を七回も続けてきているのですから、何ともお人好しな雰囲気です。今年四月の大会での面白い現象をお披露目しましょう。

今年は二人選を実施しましたが、思った通り色々な珍現象が生じました。そんな中、「痛い」という課題で、全くの同想句がありました。この様に思い付く句材が似れば句姿も大方似てきます。競吟の場合、第一発想句は捨てる・・・と言われるのはこの為です。

「痛いところ飛んで行かない年になる」

「痛いのが飛んで行かない年となり」

また没句を整理してみると、意味不明な句が多々ありました。川柳は一句独立していなければならぬとされていますが、競吟の場合、選者の技量にもよるでしょうが、存外課題に寄り掛かった句が多くあります。次の様な句は、課題に寄り掛けてみても意味不明です。作者のアタマの中では完成されているのでしようが、読み人にとっては迷句でしかありません。

「感ずればまだいいのだが困ったな」（痛い）

「痛い腰懐までに響く治癒」

（痛い）

「いろいろと川を思つて真田丸」

（忙しい）

「猫の手を借りたい猫がエサねだる」

（忙しい）

「熱弁に居れば飛び出す途中下車」

（いろいろ）

「若気です泣かし泣かされみなラップ」

（いろいろ）

次号課題は「急ぐ」。課題句二句と自由句は三句を

ご投稿下さい。締切日は八月末日です。

（右記事の川柳大会での挨拶風景の写真です。）

